View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

【総合福祉科学研究】 第 5 号 041–050 頁

【論文】

心理的居場所の研究

ー大学生のアイデンティティの確立と情動知能の見地からー

吉川 満典，粟村 昭子

Study on Psychological Ibasho

—From the Viewpoint of Emotional Intelligence and University Students' Establishment of Identity—

Mitsunori Yoshikawa and Akiko Awamura

05
2014年3月
総合福祉科学研究
Journal of Comprehensive Welfare Sciences

【論文】

心理的居場所の研究

—大学生のアイデンティティの確立と情動知能の見地から—

吉川　満典 *，粟村　昭子 **

Study on Psychological Ibasho

—From the Viewpoint of Emotional Intelligence and University Students' Establishment of Identity—

Mitsunori Yoshikawa and Akiko Awamura

要　旨

不登校の子どもたちの問題に「居場所」という言葉が使われ始めたのは1980年頃である。最近では居場所の研究領域も広がり，青年心理学の分野では「居場所」と「自己」「アイデンティティ」などの関係が研究されている。また，変化の激しい現代社会に適応するための能力として「情動知能」という概念が注目され始めている。この能力は対人関係や社会に適応するために必要とされるが，大学生が居場所を持つことやそうした居場所を通じてアイデンティティを確立させていくこととも関係があるものと考えられた。以上のことから，本研究ではそれらの関係性を明らかにすることを目的として調査を行った。

その結果，「受容される居場所」「成長できる居場所」「対人コントロール」「状況コントロール」が大学生のアイデンティティの確立度を高めることと関係していることが分かった。そのため，大学生には他者との親密な交流のある居場所や情動知能の諸能力が必要とされると考えられた。

Abstract

The word "ibasho" (literally, shelter) came into existence in the 1980s, when chronic absenteeism among schoolchildren became an issue. In recent years, research into ibasho has increased. In the field of youth psychology, the relationship between "ibasho," "self," and "identity" has been studied, and the concept of "emotional intelligence" as a skill for adapting to the rapidly changing modern society is beginning to attract attention. This ability is necessary for developing interpersonal relationships in society. However, it is also related to the university students' recognition of ibasho and its role in the establishment of their identity. In this study, we conducted a survey to clarify the relationship among these factors.

As a result, we found that "ibasho that allows acceptance," "ibasho that allows personal development," "interpersonal control," and "situation control" correlated with enhancement

受付日　2013.9.11　／　受理日　2013.9.25

* 独立行政法人　国立病院機構　刀根山病院　神経内科部　療育指導室／** 関西福祉科学大学　社会福祉学部　教授

of university students' establishment of identity. Therefore, university students need an ibasho that enables them to enjoy close social relationships with others and various emotional intelligence skills.

● ● ○ **Key words**　大学生 University students／アイデンティティ identity／心理的居場所 psychological ibasho／情動知能 emotional intelligence／親密さ intimacy

脚注　＊）本論文は，第一筆者が関西福祉科学大学大学院に提出した修士論文の一部に加筆･修正したものである。

Ⅰ．問題と目的

近年，「居場所」という言葉をよく耳にする。居場所という言葉が使用されるようになったのは，不登校が社会問題として取り扱われ始めた1980年頃からである。住田・南ら（2003）によると，「居場所」という言葉は当初，不登校の子どもたちの避難所といった消極的な意味合いで使われていたのであるが，最近では，「自己受容」「自己承認」「自己確認」の場といった積極的な意味合いを持つ言葉としても使用され始めており，現代人は他者との関係性の中にそれらを求めようとしているのではないかと結論付けている[14)]。

また，「居場所」の研究領域は徐々に拡大されてきており，最近では，精神分析や青年心理学の領域においても居場所の研究が行われている。先ず，精神分析の領域では北山（1993）が，「居場所」とは自分が自分であるための環境のことであるとし，アイデンティティ論に基づいて思春期・青年期における居場所の重要性を指摘している[8)]。すなわち思春期・青年期は自己の分裂を防ぐための自我機能が問われやすい時期であり，それまでに鍛えられているはずの移行能力が問われる時期でもあるが，それに失敗すると「居場所がない」「自分がない」という困難が露呈するとしている[8)]。また，「自分がない」という状態はアイデンティティ論におけるアイデンティティ拡散の状態として理解することが有効な時もあると示唆している[8)]。

また青年心理学の領域からは，都筑（1998），小沢（1998，2002，2003），白井（1998）らによって調査研究などが行われている。先ず，都筑（1998）は居場所を青年の自己形成の場としても捉えており[16)]，物理的な場と心理的要因の双方から考察している。次に小沢（1998，2002，2003）は一連の研究の中で，自分が自分であることの基準は個人の中に幾つかあるが，それは相互に関係し，それに対応した幾つかの居場所がゲシュタルトをなしていることを指摘している[5) 6) 7)]。さらに白井（1998）は，看護専門学校生への調査によって，受容される場が自己受容を高めること，成長できる場や安心できる場が自己肯定を高めることなどを明らかにしている[12)]。

ところで，大学生のアイデンティティと心理的居場所の関係性について先の筆者ら（吉川・粟村，2013）の研究から，心理的居場所のあるものはないものに比べて，アイデンティティがより確立されており，アイデンティティの基礎となる気持ちもより強く持っていることがわかった。これらの居場所は「成長できる居場所」「受容される居場所」といったものであり，このような他者との親密な交流のある居場所を持つことは，アイデンティティをより確立させ，また，アイデンティティの基礎となる気持ちは1人では高まらず，他者から受容されていることが必要であると考えられた[19)]。

ところで，近年においては「情動知能」という概念が新たに提唱されており，注目され始めている。「情動知能」とは，知能をより包括的に多面的に捉えようとする研究から提唱された概念であり，知能全体の中の情動的な側面を捉えるものとされている。情動と思考の相互間での影響が注目されるようになったのは1970年頃からであるが，Mayer ら（1997）によると，情動知能は情動を知覚すること，思考を助けるために利用し作り出すこと，情動と情動の知識を理解すること，情動的知的な成長を促すように情動を制御することと定義されている[18)]。

現在のところ，情動知能の概念や定義は研究者の主張によって様々であるが，大竹・島井・内山ら（2002）によると，情動知能とは感情を上手に生かす能力のことであり，個人が健康で自分らしく生活するために重要であるだけでなく，安定的で健康な対人関係を築き維持するためにも，また，変化の激しい現代社会に適応し活力を持って貢献していくためにも大きな役割を持っていると考えられている[3)]。

また，情動知能には状況に対応するための能力が含まれているが，大竹・島井・内山ら（2002）によると，その能力こそが対人関係や社会適応を図っていくためには必要なものであるとされている[3)]。

以上のように，情動知能の能力は対人関係や社会適応にも関係しているものとされているが，その能力を持っていることが他者との間に親密な交流のある居場所を持つこととも関係しているのではないかとも考えられる。よって，研究１では，大学生の情動知能を調査することによって，他者との間に親密な交流のある居場所を持っていることとの関係を検討することを目的の一つとする。また，居場所はアイデンティティの確立と大きく関わっていることがわかった（吉川・粟村，2013）[19)] が，研究2では大学生の発達課題であるアイデンティティの確立と情動知能との関係を明らかにすることを目的とする。なお，現在のところは居場所についての明確な定義はなされていない。しかし，種々の先行研究からは居場所とは単なる物理的な場を指すだけではなく，自己肯定やセルフ・エスティームを高め，アイデンティティをより確立させるものであることが分かっている。また，そのような居場所には受容され，成長や安心できる他者との交流があるのである。そこで本研究においては，「居場所」を「あるがままの自分を受け入れてくれる仲間がおり，あるがままの自分でいることができる仲間との交流のもとで，ともに成長・発展していける力動的な場」として定義することとする。また，本論文はそのような定義に基づいて結果の解釈を進めていくこととするが，本研究を行った動機は，あくまでも今日の大学生がアイデンティティを確立させていくための一助となるためであり，それは本研究の目的とも通ずるものである。

Ⅱ．研究１

１．方法

⑴調査対象者

大阪府下の四年制大学の学生に調査を求めた。回答が得られた296名のうち，もれなく回答した203名（男性59名，女性144名，平均年齢20.29歳，SD ＝ 1.14）のデータを分析対象とした。

⑵調査時期

2010年7月から9月にかけて。

⑶手続き

大学の講義時間に無記名の調査用紙を配布し，その場で回収した。また，倫理的配慮として，調査の協力は任意であり回答を拒否できることを伝えた。

⑷調査内容

①居場所条件尺度

本尺度は，居場所の物理的状況と心理的要因を検討するために白井（1998）が開発した心理尺度である[11) 12)]。

本尺度では居場所の有無を尋ねたうえでその「現実（持っているもの）」と「理想（求めるもの）」という2つの側面から居場所の条件を測定する。居場所については「受容される居場所」「1人になれる居場所」「成長できる居場所」「安心できる居場所」という4つの因子に分類されている。「受容される居場所」は，自分の本音を出せてありのままの自分が認められ，本気になってくれる人がいる居場所であり，「1人になれる居場所」は，ホッと一息つける居場所，「成長できる居場所」は，同じ目標を持ち，一緒に成長できる人がいる居場所，「安心できる居場所」は，心を癒してくれる人がいる居場所のことである。また，心理特性においては，「目標の有無」との関連性が得られている。尺度は22の質問項目から構成されている。回答は5件法で求め，各項目への回答に対して1～5点が与えられる。

② EQS

本尺度は「情動知能」を測定するための評価尺度として内山ら（2001）が開発した心理尺度である[1) 3)]。

Table 1
情動知能の対象領域と対応因子

EQS 尺度因子	
自己対応	もっぱら自己の心の働きについて知り，行動を支え，効果的な行動をとる能力。
自己洞察	自己の感情状態を知ることができ，また自己の感情表現力についても分かっていること。
自己動機づけ	自己の行動を目標達成に向けて維持するための動機的な力。
自己コントロール	自分の行動を自分で調整する能力。
対人対応	他者の感情に関する認知や共感をベースに，他者との人間関係を適切に維持することのできる能力。
共感性	他者の感情状態を知り，その感情に応じて適切な感情反応を起こす能力。
愛他心	他者を思いやる気持ち。
対人コントロール	他者の能力を生かす力，えり好みせずに人間関係を作る力，自分の利益を後回しにする力。
状況対応	集団を取り巻く状況の変化に耐える力，リーダーシップ，また状況に応じて能力を使い分ける統制力。
状況洞察	悲観的にならず，変化する状況の意味を正確に理解し，適切に対処する能力。
リーダーシップ	適切な状況判断に基づいて集団を動かす力。
状況コントロール	状況の適切な認識に基づいて臨機応変の処置ができ，また自分を変えていくことができる能力。

本尺度は「自己対応」「対人対応」「状況対応」という3つの対象領域から構成されており，さらに各対象領域にはそれぞれに3つの対応因子が設定されている。なお，対象領域と対応因子が持つ意味についてはTable1に示した。本尺度は65の質問項目から構成されている。回答は5件法で求め，各項目への回答に対して0～4点が与えられる。

2．結果と考察

居場所の有無と EQS の得点比較について

EQS によって大学生の情動知能を構成する能力や技能を測定した。結果はTable2に示したとおりである。また，居場所のあるものと居場所のないものの得点に差があるかどうかを調べた。結果を Table3 に示す。

Table3から分かるように，居場所のあるものと居場所のないものとでは各対象領域の全てに非常に明らかな有意差（「自己対応（t=2.65，df=201，p ＜ .01）」「対人対応（t=3.90, df=201, p ＜ .001）」「状況対応（t=3.36, df=201，p ＜ .001）」）がみられた。

また，各対応因子においてもそれら全てに有意差（「自己洞察（t=2.55，df=201，p ＜ .05）」「自己動機づけ（t=2.25，df=201，p ＜ .05）」「自己コントロール（t=2.20，df=201，p ＜ .05）」「共感性（t=2.89，df=201，p ＜ .01）」「愛他心（t=3.23，df=201，p ＜ .001）」「対人コントロール（t=3.70，df=201，p ＜ .001）」「状況洞察（t=3.69，df=201，p ＜ .001）」「リーダーシップ（t=2.35, df=201, p ＜ .05）」「状況コントロール（t=2.89，df=201，p ＜ .01）」）がみられている。

以上のことから，居場所のあるものは居場所のないものに比べて有意に情動知能を構成する能力や技能の全てを持っていることが示唆された。これは，居場所

Table 2
大学生の情動知能（N=203）

EQS 尺度因子	平均値	*SD*
自己対応	2.06	0.70
自己洞察	1.96	0.79
自己動機づけ	2.37	0.84
自己コントロール	1.92	0.77
対人対応	2.16	0.69
共感性	2.62	0.86
愛他心	2.44	0.81
対人コントロール	1.66	0.76
状況対応	1.70	0.81
状況洞察	1.94	0.82
リーダーシップ	1.31	0.97
状況コントロール	1.73	0.94

Table 3
居場所の有無と EQS の得点比較

	居場所のあるもの（N=187）		居場所のないもの（N=16）			
EQS 尺度因子	平均値	*SD*	平均値	*SD*	*df*	*t* 値
自己対応	2.09	0.70	1.62	0.52	201	2.65 **
自己洞察	2.00	0.78	1.48	0.70	201	2.55 *
自己動機づけ	2.40	0.83	1.92	0.85	201	2.25 *
自己コントロール	1.95	0.78	1.51	0.51	201	2.20 *
対人対応	2.21	0.68	1.53	0.52	201	3.90 ***
共感性	2.67	0.85	2.03	0.80	201	2.89 **
愛他心	2.49	0.80	1.82	0.67	201	3.23 ***
対人コントロール	1.72	0.75	1.01	0.54	201	3.70 ***
状況対応	1.76	0.81	1.06	0.59	201	3.36 ***
状況洞察	2.00	0.81	1.24	0.62	201	3.69 ***
リーダーシップ	1.36	0.97	0.77	0.73	201	2.35 *
状況コントロール	1.78	0.95	1.08	0.66	201	2.89 **

***p ＜ .001，**p ＜ .01，*p ＜ .05

のあるものは対人関係や社会適応を図っていくために必要とされる状況に対応する能力だけではなく，情動知能を構成する他の全ての能力をも有意に持っていたことを意味するものである。

また，吉川・粟村（2013）によると，居場所のあるものは「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった他者との間に親密な交流のある居場所を持っており，居場所のないものは「1人になれる居場所」のような他者との親密な交流を回避できるような居場所を理想としている[19]。このことからも，情動知能を構成する能力や技能を持っていることは，「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった他者との間に親密な交流のある居場所を持つこととも関係していることが示唆されたといえそうである。また，対人関係や社会適応に必要とされる状況に対応する能力と居場所のあることとの関係にも同様のことがいえる。しかし，それらの居場所と情動知能の他の尺度因子との関係をも分析するためには，より詳細な統計処理が必要である。

Ⅲ．研究２

1. 目的

居場所という，ある意味守られた対人交流のある心理的な場を持つことが，青年期の大学生にとってどのような意味があるのかを明らかにすることが本研究の目的となる。言い換えると，ここではアイデンティティの確立と情動知能にどのような関係があるのかをみることを目的とする。

2. 方法

⑴調査対象者

研究1の調査対象者のうち，居場所があるとした187名を研究対象者としている。

⑵調査時期および手続き

研究1と同じである。

⑶調査内容

アイデンティティ尺度と研究1で使用したEQS，居場所条件尺度である。

アイデンティティ尺度

小此木（1978）が指摘した日本の大学生の新しいモラトリアム心理[4]と今日の大学生のアイデンティティの確立度との関連性を検討するために下山（1992）が開発した心理尺度である[9) 10)]。

本尺度は「アイデンティティの確立」と「アイデンティティの基礎」という2つの尺度から構成されている。「アイデンティティの確立」尺度は自己の主体性や自己への信頼が形成されているかどうかを測定するためのものであり，「アイデンティティの基礎」尺度は自己の安定が得られずに不安や孤独におそわれる気持ちを測定するものである。尺度は20の質問項目から構成されている。回答は4件法で求め，各項目への回答に対して1～4点が与えられる。

3. 結果と考察

⑴アイデンティティ尺度に関係するEQSの尺度因子について

居場所のあるもののアイデンティティ尺度に関係するEQSの尺度因子を分析するために重回帰分析による偏回帰係数の検定を行った。

結果はTable4に示した。「アイデンティティの確立」尺度との関係においては，決定係数が0.44であり，「対人コントロール（係数＝－0.16，t ＝－2.13）」と「状況コントロール（係数＝0.22, t ＝2.38）」が有意であった。よって，「状況コントロール」は「アイデンティティの確立」尺度と正の関係にある重要な要因であり，ま

Table 4
「アイデンティティの確立」尺度に関係する要因（N=187）

EQS尺度因子	アイデンティティの確立
自己対応	
自己洞察	1.26
自己動機づけ	1.75
自己コントロール	0.69
対人対応	
共感性	1.25
愛他心	-1.17
対人コントロール	-2.13 *
状況対応	
状況洞察	1.49
リーダーシップ	1.76
状況コントロール	2.38 *

***p＜.001，**p＜.01，*p＜.05

Table 5
「アイデンティティの基礎」尺度に関係する要因（*N*=187）

EQS 尺度因子	アイデンティティの基礎
自己対応	
自己洞察	0.71
自己動機づけ	0.21
自己コントロール	-1.42
対人対応	
共感性	-0.52
愛他心	-2.00 *
対人コントロール	1.98 *
状況対応	
状況洞察	0.48
リーダーシップ	-0.21
状況コントロール	3.34 ***

***p ＜ .001，**p ＜ .01，*p ＜ .05

た，「対人コントロール」は負の関係にある要因であることが示唆された。

また，結果を Table5 に示すが，「アイデンティティの基礎」尺度との関係では，決定係数が0.29であり，「愛他心（係数＝－0.18, t ＝－2.00）」「対人コントロール（係数＝0.17, t ＝1.98）」「状況コントロール（係数＝0.36, t ＝3.34）」が有意であった。よって，「対人コントロール」と「状況コントロール」は「アイデンティティの基礎」尺度と正の関係にある重要な要因であり，「愛他心」は負の関係にある要因であることが示唆された。

以上のことから，居場所のあるものの「アイデンティティの確立」には「状況コントロール」と「対人コントロール」が関係していることが分かった。なお，「状況コントロール」とは，状況の適切な認識に基づいて臨機応変の処置ができ，また自分を変えていくことができる能力のことであり，「対人コントロール」は，他者の能力を生かす力，えり好みせずに人間関係を作る力，自分の利益を後回しにする力のことである。

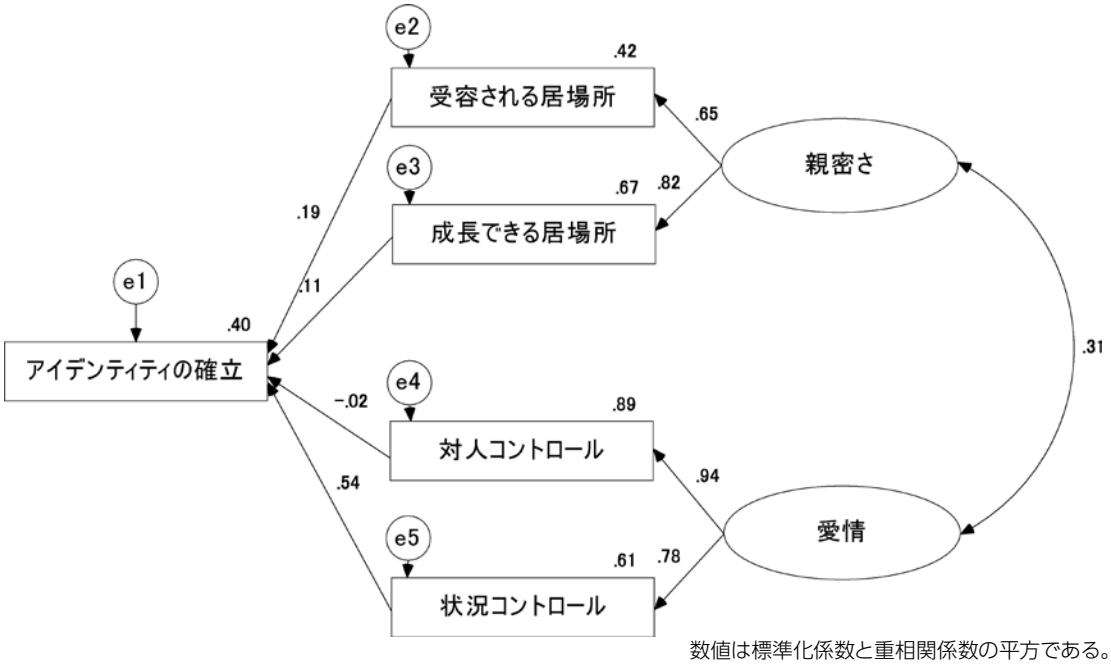
よって，情動知能を構成する能力や技能のうち，対人関係や社会適応に関係するとされている状況に対応する能力が大学生のアイデンティティの確立にも関係する重要な要因であることが示唆されたといえた。また，「対人コントロール」のような他者への能力は自分の個性を押し殺すものともいえ，これが弱いほど大学生のアイデンティティの確立がうながされることが推測された。しかし，居場所のあるものは居場所のないものに比べて「対人コントロール」の能力も有意に持っていたことから，他者の利益などを優先できることは，居場所づくりという観点からは重要な要因であることも考えられた。

また，居場所のあるものの「アイデンティティの基礎」には「愛他心」「対人コントロール」「状況コントロール」が関係していることが分かった。なお，「愛他心」とは他者を思いやる気持ちのことであり，「対人コントロール」と「状況コントロール」については前述のとおりである。

よって，アイデンティティの確立と同様に「状況コントロール」のような対人関係や社会適応に関係する能力は大学生のアイデンティティの基礎にも関係する重要な要因であることが示唆された。また，おもしろいことに他者を思いやる能力である「愛他心」が少ないほど，すなわちやや語弊があるかも知れないが，自己愛的であるほどアイデンティティの基礎と関係することも確認された。しかし，アイデンティティの確立の結果とは異なり「対人コントロール」がアイデンティティの基礎と関係する重要な要因となっているのが特徴である。本研究における「アイデンティティの基礎」とは，自己の安定が得られずに不安や孤独におそわれる気持ちのことである[9) 10)]。そのため，そのような状態にある個人は，安心を得るためにそれを与えてくれるような同質性の他者を求めるようになるものと考えることができるが，「対人コントロール」といった他者の利益を優先できる能力を持っていることがそのような仲間づくりを可能としているのではないかと考えられた。また，そうして形成された集まりに生じてくる親密な交流が「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった居場所をつくり上げる要因となっているのではないかと考えられた。

⑵アイデンティティ尺度と EQS との関係性のつながりについて

重回帰分析による偏回帰係数の検定の結果，「アイデンティティの確立」尺度には「状況コントロール」「対人コントロール」が重要な要因となっていることが分かった。また，吉川・粟村（2013）の調査により，「受容される居場所」「成長できる居場所」も重要な要因となっていることが示唆されている[19)]。そのため，居場所のあるものの「アイデンティティの確立」尺度と他の尺度因子との関係性のつながりを分析するために共分散構造分析を行った。また，本研究においては，それらと関係のあるものとして「親密さ」と「愛情」という2つの潜在変数を設定した。結果は Figure に示



数値は標準化係数と重相関係数の平方である。

Figure
アイデンティティの確立との関係性のつながり（*N*=187）

したが，χ^2乗値はχ^2（1）=0.189，$p > .05$であり，有意水準には入らず，また，RMR=.354，GFI=.996，AGFI=.945であったことからモデルの適合度は高いと判断することができた。

同様に，「アイデンティティの基礎」尺度には「愛他心」「対人コントロール」「状況コントロール」が重要な要因となっており，吉川・粟村（2013）の調査によって，「1人になれる居場所」「受容される居場所」が重要な要因となっていることも示唆されている[19]。そのため，居場所のあるものの「アイデンティティの基礎」尺度と他の尺度因子との関係性のつながりを分析するために共分散構造分析を行った。また，潜在変数については「親密さ」と「愛情」の2つを設定した。しかし，結果を得ることができず，これについては今後の研究課題として残されることとなった。

以上のことから，大学生の「アイデンティティの確立」には「受容される居場所」「成長できる居場所」「状況コントロール」「対人コントロール」との関係性のつながりがあることが示唆された。「受容される居場所」とは，自分の本音を出せてありのままの自分が認められ，本気になってくれる人がいる居場所のことであり，「成長できる居場所」とは，同じ目標を持ち，一緒に成長できる人がいる居場所のことである。また，「状況コントロール」とは，状況の適切な認識に基づいて臨機応変の処置ができ，また自分を変えていくことができる能力のことであり，「対人コントロール」は，他者の能力を生かす力，えり好みせずに人間関係を作る力，自分の利益を後回しにする力のことである。

まず，吉川・粟村（2013）と同様に，大学生のアイデンティティの確立には「受容される居場所」や「成長できる居場所」といった他者との間に親密な交流のある居場所を持つことが重要な要因として関係していることを改めて確認することができた。また，情動知能との関係においては，「状況コントロール」という対人関係や社会適応に必要とされる状況に対応する能力がアイデンティティの確立との関係性のつながりをみせており，「対人コントロール」のような自分を押し殺し他者を立てるような能力については低いほどアイデンティティが確立されやすいことが示唆される結果となった。なお，本研究においては，「受容される居場所」と「成長できる居場所」という2つの居場所に共通する概念として「親密さ」という潜在変数を設定し，「対人コントロール」と「状況コントロール」という情動知能を構成する2つの能力に共通する概念として「愛情」という潜在変数を設定することにした。これらはともに成人期初期の発達段階で求められるものである。

成人期初期の発達課題は「親密さ対孤立」であるが，

「親密さ」とは自分自身についてのより確実な感覚が持てることにより相手に呑み込まれてしまうといった自己喪失への不安や恐怖を抱くことなく他者との融合関係を築ける能力のことであると田端（2004）は説明している[15)]。また，この段階で発達する人格的活力は無私の気持ちで互いに尽力し合える「愛情」であると田端（2004）は述べている[15)]。

以上のことから考察していくと，先ず「状況コントロール」のように状況の適切な認識に基づいて自由自在に自分を変えていけるといった能力を持つことが「アイデンティティの確立」には関係しているということがいえる。そして，そのように自在に自分を変えていける能力を持っていることこそが，ある程度は既に自分というものが確立されているということであり，その上で成立する能力でもあるということが考えられた。また,「愛情」との関係についても同様であり，それなりに自分というものが確立されているからこそ他者にも目を向けることができるものと考えられた。

次に,「対人コントロール」をみると,「アイデンティティの確立」とは負の関係にあることが分かった。しかし，先に考察したとおり「対人コントロール」のような自分ではなく他者の利益を優先できる能力を持っていることは仲間づくりを可能とし，そして，そのような集まりの中で生じる親密な交流が「受容される居場所」や「成長できる居場所」をつくり上げる要因となっていることが考えられた。また，本研究では，無私の気持ちで互いに尽力し合える人格的活力を想定した「愛情」という潜在変数を介して2つの居場所と関係する「親密さ」とのつながりを与えたが，先ず,「対人コントロール」のように自分ではなく他者を優先することができる能力を持てることは,「愛情」という概念のように私を無くして無私の気持ちになれることとも共通する部分があるものと考えることができる。また,「愛情」という概念は,「親密さ」という相手に呑み込まれてしまうことなく他者との融合関係を築けるということを想定した潜在変数とのつながりをみせているが，ある程度，自分というものが確立されつつもそれでいて他者のために自分というものを無くした行動をとれるという点で何らかの関係性があるものと考えられた。そして,「受容される居場所」や「成長できる居場所」はそのような人たちの親密な交流から発生してくるものと考えられるのであるが，最終的にはそれらの概念や因子の全てが関係し合ってその人の「アイデンティティの確立」に集約されていくものと考えられた。

Ⅳ．総合考察

研究1の目的は，大学生の情動知能を調査することによって他者との親密な交流のある居場所を持つことと の関係性を検討することであった。また，研究2では居場所を持つ大学生はアイデンティティをより確立しやすいことを踏まえて，大学生の発達課題であるアイデンティティの確立と情動知能との関係性を明らかにすることを目的の中心としたものであった。

本研究の結果からは，居場所のあるものは居場所のないものに比べて対人関係や社会適応を図っていくために必要とされる状況に対応する能力だけではなく，情動知能を構成する他の技能や能力の全てを有意に持っていることが示唆された。

また，居場所のあるものの「アイデンティティの確立」には「状況コントロール」と「対人コントロール」という能力が関係していることが明らかとなった。よって,「状況コントロール」のような対人関係や社会適応に関係するとされている状況に対応する能力を持つことは大学生のアイデンティティの確立にも関係する重要な要因であることが示唆されたといえる。また,「対人コントロール」のような他者への能力は大学生のアイデンティティの確立とは負の関係にあることも示唆されたが，居場所づくりという観点からは重要な要因になっていることが考えられた。

次に，居場所のあるものの「アイデンティティの基礎」には「愛他心」「対人コントロール」「状況コントロール」が関係していることが明らかとなった。よって,「状況コントロール」のような対人関係や社会適応に関係する能力は大学生のアイデンティティの基礎にも関係する重要な要因であることが示唆された。また,「愛他心」のような他者への能力はアイデンティティの基礎とは負の関係があることも確認された。なお，アイデンティティの確立とは異なり,「対人コントロール」がアイデンティティの基礎，すなわち青年期の情緒的安定に関係する重要な要因となっていることも分かった。

さらに，共分散構造分析の結果からは，大学生の「アイデンティティの確立」には「受容される居場所」「成長できる居場所」「状況コントロール」「対人コントロール」が関係していることが示唆された。また，本研究では「受容される居場所」と「成長できる居場所」には「親密さ」という潜在変数を設定し，「対人コントロール」と「状況コントロール」には「愛情」という潜在変数を設定している。なお，「アイデンティティの基礎」との関係については結果が得られなかったことから今後の課題となった。

以上のことから考察すると，先ず「状況コントロール」のように状況の適切な認識に基づいて自由自在に自分を変えていける能力が「アイデンティティの確立」には関係していたが，既にある程度は自分というものが確立されているからこそそのような能力を持つことが可能となっていることが考えられた。また，「愛情」についても同様であり，それなりに自分というものが確立されているからこそ他者にも目を向けることができるものと考えられた。次に，「対人コントロール」については，「アイデンティティの確立」とは負の関係であった。しかし，「対人コントロール」のような他者の利益を優先できる能力を持っていることは仲間づくりを可能とし，それが「受容される居場所」や「成長できる居場所」を発生させる要因となっていることも考えられる。また，本研究では，無私の気持ちで互いに尽力し合える人格的活力を想定した「愛情」という潜在変数を介して「親密さ」という概念とのつながりを与えたが，最終的にはそれらの概念や因子の全てが関係し合って「アイデンティティの確立」に集約されていることが考えられた。

以上のように本研究の結果をまとめたが，吉川・粟村（2013）の調査によると，大学生が居場所としているところの上位3つは「友人」「家族」「自分の家」となっており，最も重要な居場所では「家族」「友人」「自分の家」の順となっている[19]。これは，居場所のあるものが持つ「受容される居場所」や「成長できる居場所」には「家族」や「友人」がいるということを示すものであることが考えられる。つまりは，「受容される居場所」のような自分の本音を出せてありのままの自分が認められ本気になってくれる人がいる居場所や「成長できる居場所」といった同じ目標を持ち一緒に成長できる人がいる居場所には「家族」や「友人」がいるということである。また，そのような人間関係を持つには，「対人コントロール」といった他者の能力を生かす力，えり好みせずに人間関係を作る力，自分の利益を後回しにする力や「状況コントロール」のような状況の適切な認識に基づいて臨機応変の処置ができ，自分を変えていくことができる能力を持つことが関係しているということでもある。そして，さらにそれらは「アイデンティティの確立」にもつながることが示唆された。よって，アイデンティティの確立度をより高めるためには「受容される居場所」「成長できる居場所」「対人コントロール」「状況コントロール」が重要な要因として関係していることが明らかになったということができる。

住田・南ら（2003）は，「いじめ」や「学級崩壊」「引きこもり」「家庭内暴力」などを起こす子どもたちには「居場所がない」という共通点がみられるとしている[14]。本研究においては，居場所のないものは居場所のあるものに比べて，有意に情動知能を構成する能力や技能の全てを持っていないことが示唆された。また，吉川・粟村（2013）の調査によって，居場所のないものは「1人になれる居場所」といった他者との交流を回避できるような居場所を理想としていることも明らかにされている[19]。Erikson は，成人の「基本的信頼」の欠損に触れて，「基本的不信」は自分自身や他者との関係が上手くいかなくなると，時にそのような状態にある人々においては閉じこもり，食べ物や慰めを拒絶し，友人との交わりを忘れてしまうと述べている[2]。さらに，Fromm-R（1950）の記述[17]を引用して，心理療法によってそうした人々を援助するならば，彼らが世界を信頼し，自分自身を信頼する確信が持てるように特別な方法で彼らにもう一度近づき直す工夫をしなくてはならないとしている[2]。そのことからも，居場所のないものは Erikson が指摘しているとおり，他者との関係が上手くいかずに閉じこもってしまうという「基本的不信」に近い状態に陥っているのではないかと考えることもでき，またそれは，住田・南らが述べているような，今日の「いじめ」や「学級崩壊」「引きこもり」「家庭内暴力」を引き起こす「居場所がない」という子どもたちにも同等のことがいえるものと考えられる。そして，もしそうであるならば，Fromm-R がいうように，居場所のないものにはもう一度自分自身に近づき直し，自分自身を信頼する確信を持てるよ

うになれるための場，あるいは何らかの心理的支援が必要とされているということかもしれない。

吉川・粟村（2013）では，居場所のないもののサポートにおいては，大学が様々な居場所を提供していくことが有効であるかもしれないとし，そしてそれは，単なる「場」の提供に終わらずに彼らの「人間的成長」を助けるためのサポートとして行うことが重要であると結論づけた[19]。本研究の結果からも，居場所のないものには「基本的信頼」を再び取り戻せるような心理的支援が必要とされるかもしれないことを付け加えることができた。すなわちそれは，彼らが再び自分を取り巻く世界を信頼し，自分自身を信頼する確信が持てるように，もう一度自分自身に近づき直すことが必要とされるということである。つまりは，この問題の根底には「基本的信頼」と「基本的不信」という乳児期の発達課題が回帰的に関係しているということになるのである。

以上の結果を実際の学生支援につなげていくことも大切だろう。また，少数であり，今回は詳細な分析ができなかった居場所を持っていない学生について，今後，数を集め検討していく必要があると考える。

引用・参考文献

1）内山喜久雄・島井哲志・宇津木成介・大竹恵子『EQSマニュアル』実務教育出版，2001年

2）エリク・H・エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房，2011年

3）大竹恵子・島井哲志・内山喜久雄「IQを超えるEQとは 新しい情動知能尺度（EQS：エクス）の提案」『教育と医学』50，2002年，76－82頁。

4）小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中央公論社，1978年

5）小沢一仁「青年の居場所から見たアイデンティティ」『日本青年心理学会大会発表論文集』6，1998年，32－33頁。

6）小沢一仁「居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み」『東京工芸大学工学部紀要』25，2002年，30－40頁。

7）小沢一仁「居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと」『東京工芸大学工学部紀要』26，2003年，64－75頁。

8）北山　修『北山修著作集　日本語臨床の深層　第3巻 自分と居場所』岩崎学術出版社，1993年

9）下山晴彦「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』34，1986年，20－30頁。

10）下山晴彦「大学生のモラトリアムの下位分類の研究―アイデンティティの発達との関連で―」『教育心理学研究』40，1992年，121－129頁。

11）白井利明「学生は居場所をどうとらえているか―自己受容とセルフ・エスティームとの関連―」『日本青年心理学会大会発表論文集』6，1998年，34－35頁。

12）白井利明「若もの・心もよう⑩　若者に居場所はあるのか」『大学進学研究』108，1998年，54－59頁。

13）鈴木乙史「人間のライフサイクル」梅本堯夫・大山　正（監）『新心理学ライブラリ9　性格心理学への招待[改訂版]』サイエンス社，2003年，96－109頁。

14）住田正樹・南　博文「はしがき」住田正樹・南　博文（編）『子どもたちの居場所と対人的世界の現在』九州大学出版会，2003年，1－5頁。

15）田端純一郎「アイデンティティの形成と病理」西川隆蔵・大石史博（編）『人格発達心理学』ナカニシヤ出版，2004年，103－116頁。

16）都筑　学「青年心理学から見た居場所の問題」『日本青年心理学会大会発表論文集』6，1998年，30－31頁。

17）Fromm-R，F.『*Principles of Intensive Psychotherapy*』Chicago:University of Chicago Press.1950.

18）Mayer，J.D.「情動知能フィールドガイド」Ciarrochi，J.,Forgas，J.P.,& Mayer，J.D.（編）中里浩明・島井哲志・大竹恵子・池見　陽（訳）『エモーショナル・インテリジェンス　日常生活における情動知能の科学的研究』ナカニシヤ出版，2005年，3－30頁。

19）吉川満典・粟村昭子「大学生におけるアイデンティティの確立について―心理的居場所との関係性から―」『総合福祉科学研究』4，2013年，35－41頁。